

論文審査結果の要旨

本論文の内容は公开发表会（平成26年2月20日午後3時から5時 文学部会議室）において説明がなされ、質疑が行われた。その際の質疑の主な内容は、以下の通りである。

【第一章】

①甲冑の「構造」がキーワードとしてしばしば登場するが、その意図するところは何か。

【第二章】

②朝鮮半島での小札式甲冑の展開過程が十分に示されていないが、日本列島に影響を与えた同時期の資料としてどのようなものがあるのか。

③小札の規格化について触れているが、具体的に規格化が進む時期はいつか。

④重装騎兵の議論があるが、そもそも日本列島では小札甲がどのくらい戦闘に用いられたのか。

⑤重装騎兵の例として挙げている朝鮮半島の事例においても、騎馬に特有の膝甲が出土していないようだが、その理由は。

⑥騎兵の武装としては、さらに中国や北アジアなど、広い範囲に目を向けることで、位置づけができるのではないか。

【第三章】

⑦大須二子塚古墳の埋葬施設の復元をおこなっているが、他の事例との共通性や地域性との関係を重視すべきではないか。

⑧小札式甲冑が普及する一方で、帯金式の技術を引く冑が作られ続ける理由は何か。

⑨小札式甲冑の生産者像が具体的ではないが、馬具や矢筒などの場合との共通性や相違点から、どのような編成過程が浮かび上がるのか。

以上の質疑に対して、①「構造」は、二つの意味があり、付属具とともに構成される具体的な「構造」と、技術者の編成も含めた生産や流通の「構造」である。②韓国の事例についても研究中であるが、実物資料を見て判断するという研究の性質上、まだ十分に変遷を示すことができていない。③5世紀後葉の段階に規格が成立し、その普及が6世紀になる。④戦闘の痕跡をもつ甲冑は、日本列島での出土がまれで、香川県の王墓山古墳など、朝鮮半島系の甲冑にある点に意味があると考え。⑤韓国慶州の事例のように、膝甲は最近になって韓国でも存在が知られるようになっており、資料の再検討を通じて、確認できる事例はまだ多いと考える。⑥内モンゴルの例に、小札甲の源流かとも考えられる資料があり、今後さらに検討してみたい。⑦埋葬施設については、遺物から言及できる点は限られているが、さらに周辺の情報と合わせて理解していきたい。⑧⑨ともに工人の編成過程を考えることが重要な意味を持っており、馬具生産や矢筒生産の場合と対比しながら、甲冑の生産体制についても、歴史的変遷をみていきたい、との回答があった。

以上の質疑応答のほかにも、個別的な内容の確認などについて質疑をおこない、表現が不十分な点なども指摘され、歴史時代の甲冑との接続など、今後の展望にも関わる議論もおこなった。このように、さらに考察すべき課題も残されているが、本論文が基礎的な資料

の検討作業に十分に取り組み、古墳時代中期後期の小札甲の実態や、従来からの帯金式甲冑との関係も含め、古墳時代の甲冑の「構造」を示した点が貴重な成果であり、この基礎の上に今後の研究が展開していくものと推察する。学界に対する寄与という点でも大であると評価でき、よって、本委員会は本論文が博士（歴史学）の学位論文として価値あるものと認める。